石高神社報

第四号

昭和六十三年六月一日発行

発行者　宮司　髙原　章兆

石高神社の歴史

当社の創立年月は不祥でありますが、備前国総社神名帳に石高神社とあり、同山本氏本には正三位石高明神と載り、備前の式内・式外古社一二八社のうちの一社であります。延喜式が編纂されたのが九二七年ですので、今より千年も前からあった事になります。

社伝によりますと、昔には今の宮山から北手にあります一番高い山の高倉山の頂上に大己貴命を祀る石高神社があり、今の嶽字岩坪に須勢理姫命を祀る八幡宮がありました。この両社を天和三年（一六八三）に現在の地に合祀し、岩坪八幡宮と称して尊敬していました。関には岩壺八幡宮と刻まれた灯籠が残っています。

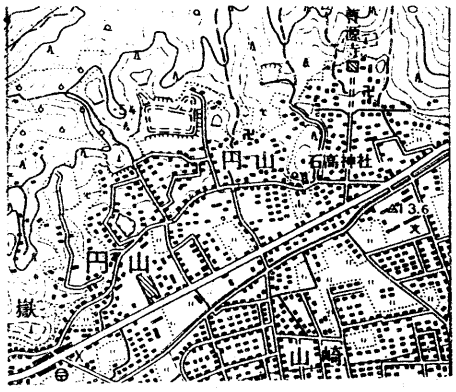
明治四年に、旧号に復し、幡多郷の総鎮守産土神と定め、大正三年村社となりました。昔の呼びかたは現在の「いしたか」ではなく、「いわたか」でした。

現在の地に移座した理由として、火事が起こったという説やいん石が落下し、その破片が山の南側に多く飛散したからという説や曹源寺を建立するのに上の方に神社があるのは邪魔になるから降ろしたという説があります。

山崎新田開発（一六六四）は既に行なわれており、倉田新田開発（一六七九）直後であることから、新田方面を守護する役目もあったように思われます。事実最初は、倉田新田も石高神社と吉備津岡辛木神社の氏子となっていましたが、沖田神社創建直後に沖田神社の氏子になりました。（一六九五）

現在の地は、南側から見ると三つの山を背景にしており、最高の立地条件だそうです。

明治二一年に幡多村、明治二二年に富山村ができてから後は、幡多という地名は、山の北側だけになっていますが、幡多郷というのは、一七二一年編纂の「備陽記」によりますと、清水・赤田・高屋・沢田・関・山崎・円山・藤原・湊の各村をさしています。上記の他、福泊も旧笠井邸より西側が氏子になっています。一六四七年に笠井太郎兵衛が福泊新田を開発した時、吉備津岡辛木神社とで二分したものと思われます。



石高神社の修理計画

昨年秋の総代会で本殿・幣殿の修理、社務所の取り壊し、表門東側石垣の修補、小さい社務所の再建、裏の自動車参道の整備を順次していく事が決議されました。

以上の様に直さなければならない所がたくさんありますが、一番急を要するのが幣殿の屋根替えです。すでに屋根地が腐っており、本殿との間の玉垣に瓦が落下してきています。また、本殿周囲の土が流失し、石がゆるんできています。

社務所は、十年以上前から修理の話だけは出ていたようですが、現在に至り、今は西側の屋根がかなり崩れ落ちて、修理不可能となっており、壊す他はありません。

表門の道路に面した石垣のうち、東側の修補がまだ残っています。灯籠の前の辺の石が特に危険です。小学生の通学路になっているので、早急な対応が必要です。

裏の自動車参道は、雨のたびに土が流されて通りにくくなります。急傾斜の場所だけでも舗装する必要があります。

他にも末社の整備、裏門の石垣・石段の修補、境内の塀の修理、境内の土の補充等たくさんありますが、とりあえず急を要するものから手をつけていくことになりました。

末社紹介 ④ 金磨宮

御本殿の東奥にある末社で俗に「かなまろさま」とよばれている性の神様です。性に関する諸々の事に御利益があり、昔は多くの参詣者があったらしく、木製の陽物が多数奉納されています。民俗学的にも有名で数冊の本に紹介されています。以下に岡長平著「ぼっこう横町」（昭四十年）から引用します。

――境内にある金磨宮と呼ぶ性神――、五十センチぐらいの、石の男根型塔の方が、ちかごろでは、有名である。梅原北明の名高い「秘戯指南」にも、斎藤晶三著「現存せる性的神祠」にも、出口末吉の「日本に於ける生殖器崇拝」にも、載っている。あんがい、岡山の人が知らんらしい。別所の瘡神様に匹敵する性神なんである。昔は、大変な絵馬や土や木の模造品が、たくさん供えられとったもんだ。

後記

五月十五日に春祭りの祭典が、小雨のなか厳粛にとり行なわれました。次の行事は、七月三十一日晩の輪くぐりです。当日も拝殿にひとがたを用意しておきますので、名前・えと等を書いてお祓いを受け、無病息災を祈ってください。今年は団扇を用意しています。

今回から関でも社報を配布していただける事になりました。各町内の関係される方々にお礼申し上げます。